



鹿児島県から得られた南限記録のミサキウナギと 北限記録のシラスミミズアナゴ

水野悠久¹・日比野友亮²・本村浩之³

Author & Article Info

¹ 鹿児島大学大学院農林水産学研究科（鹿児島市）

k4536358@kadai.jp (corresponding author)

² 北九州市立自然史・歴史博物館（北九州市）

³ 鹿児島大学総合研究博物館（鹿児島市）

Received 29 July 2026
Revised 04 August 2026
Accepted 05 August 2026
Published 06 August 2026
DOI 10.34583/ichthy.70.0_1

Yuku Mizuno, Yusuke Hibino and Hiroyuki Motomura. 2026. Southernmost and northernmost records of *Scolecenchelys aoki* and *Muraenichthys sibogae* (Ophichthidae), respectively, from Kagoshima Prefecture, southern Japan. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 70: 1–6.

Abstract

Two specimens of the myrophine worm eels (Ophichthidae) were collected from Kagoshima Prefecture, Japan in 2025: *Scolecenchelys aoki* (Jordan and Snyder, 1901) [84.2 mm total length (TL), Kagoshima Bay]; *Muraenichthys sibogae* Weber and de Beaufort, 1916 (111.3 mm TL, Amami-oshima island). The two species represent the first records from Kagoshima Prefecture, the specimens of *S. aoki* and *M. sibogae* being the southernmost and northernmost records, respectively, for the species.

ウミヘビ科ニンギョウアナゴ亜科魚類（Ophichthidae: Myrophinae）は、背鰭および臀鰭とスムーズに接続する柔らかい尾鰭をもつこと、角舌骨に接続する鰓条骨をもたないこと、および遊離鰓条骨が上舌骨に接続する鰓条骨よりはるかに多いことで特徴づけられ、これまで 15 有効属が知られている（Hibino et al., 2015；日比野・ざんくるす, 2025）。このうち日本からはこれまでにミナミミミズアナゴ属 *Muraenichthys* Bleeker, 1853（5 種）、ニンギョウアナゴ属 *Myrophis* Lutken, 1852（1）、ムカシウミヘビ属 *Neenchelys* Bamber, 1915（2）、ミミズアナゴ属 *Scolecenchelys* Ogilby, 1897（7）の 4 属 15 種が記録されている（日比野・ざんくるす, 2025）。

2025 年に鹿児島県から本亜科魚類のミサキウナギ *Scolecenchelys aoki* (Jordan and Snyder, 1901) とシラスミミズアナゴ *Muraenichthys sibogae* Weber and de Beaufort, 1916 が鹿児島湾と奄美群島の奄美大島からそれぞれ 1 個体採集され

た。これらは鹿児島県における初めての記録であり、前者は分布の南限記録、後者は北限記録となるため、ここに報告する。

材料と方法

計数・計測方法は Hibino and Kimura (2015a) と日比野・木村（2016）にしたがい、計測はデジタルノギスを用いて 0.1 mm 単位まで行った。全長（total length）は TL、頭長（head length）は HL と表記した。Prenal vertebrae (PAV) の和訳は餐場ほか（2026）にしたがい、肛門前脊椎骨数とした。各体部の観察は固定後に双眼実体顕微鏡下で行い、必要に応じてサイアニンブルーによる染色を行った。脊椎骨数の計数は軟 X 線写真を用いて行った。生鮮時の色彩はホルマリン固定前に撮影された標本のカラー写真に基づいて記載した。標本の作成、登録、撮影、および固定方法は本村（2009）に準拠した。本研究に用いた標本は鹿児島大学総合研究博物館（KAUM）に保管されており、生鮮時の写真は同館データベースに登録されている。

Scolecenchelys aoki (Jordan and Snyder, 1901)

ミサキウナギ

(Figs. 1, 2; Table 1)

標本 KAUM-I. 220770, 性別不明, 全長 84.2 mm, 鹿児島県鹿屋市沖（鹿児島湾）, 31°23'17"–24°02'N, 130°42'42"–43°43'E, 水深 70.9–74.1 m, 2025 年 10 月 2 日, ドレッジ, 南星丸, 佐藤大義氏寄贈。

記載 計数・計測値は Table 1 に示した。体は著しく細長く、軀幹部から尾部にかけて側扁する。尾部は肛門前長よりわずかに長い。頭部は小さい。頭部背縁は直線状でわずかに膨らむ。鰓嚢部はわずかに膨らむ。吻は長く、吻端は下顎先端より前方に突出し、尖る。吻腹面の中央に 1 本の縦溝があり、前鼻孔基部の前縁より前方に伸びる。前鼻孔は吻端のやや後方に位置し、短い管状。後鼻孔開口部は口の内側、眼の前下方に位置し、外側は幅広い皮弁で覆われる。眼は小さく、上顎の中央よりわずかに後方に位置す

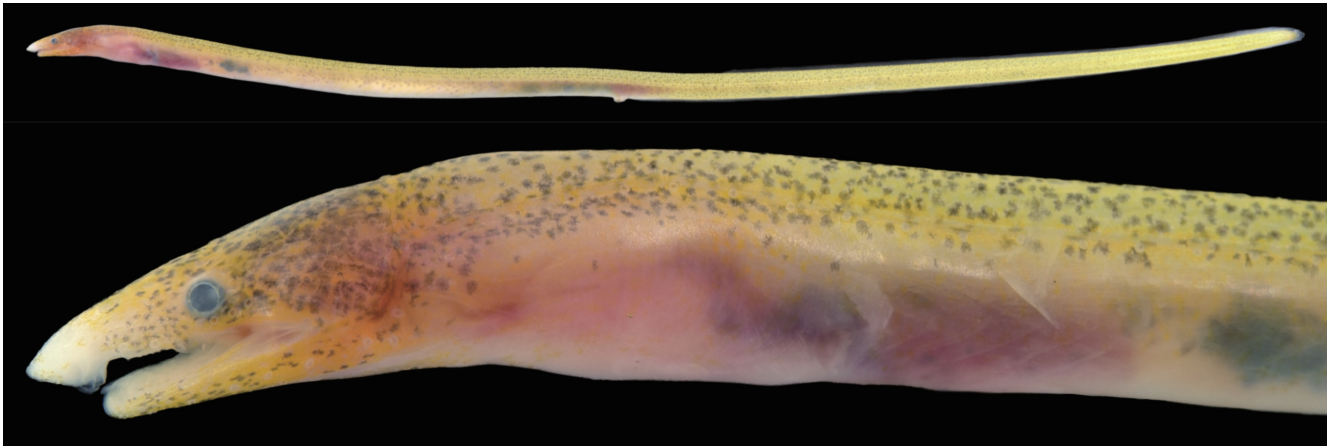


Fig. 1. Fresh specimen of *Scolecenchelys aoki* (KAUM-I. 220770, 84.2 mm TL) from Kagoshima Bay, Kagoshima Prefecture, Japan.

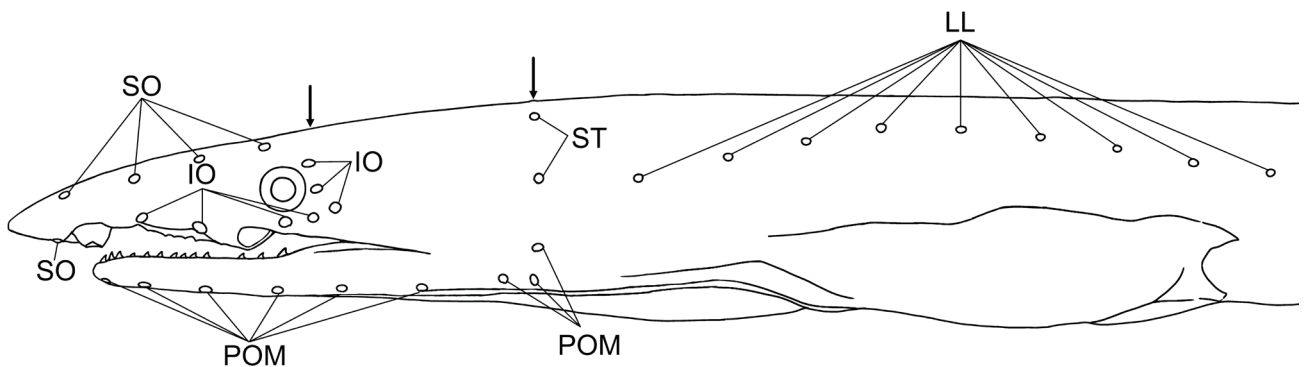


Fig. 2. Lateral view of head of *Scolecenchelys aoki* (KAUM-I. 220770, 84.2 mm TL), showing the lateral-line system. SO: supraorbital pores; IO: infraorbital pores; POM: preoperculo-mandibular pores; ST: supratemporal pores; LL: lateral line pores. Arrows indicate interorbital (left), median supratemporal (right) pores.

る。口裂末端は眼の後縁よりわずかに後方に位置する。鰓孔は小さく、体の側中線よりやや下方に位置する。頭部感覚管孔は明瞭。眼上感覚管孔 (SO) は 1 + 4 個、眼下感覚管孔 (IO) は 4 + 3 個で、前鼻孔と後鼻孔の間に 2 個もつ。下顎 — 前鰓蓋感覚管孔 (POM) は 6 + 3 個で、上側頭感覚管孔 (ST) は 2 個。眼隔域および上側頭中央部にそれぞれ感覚管孔を 1 個もつ。側線管孔は小さく、鰓孔前の側線管孔は 8 個 (Fig. 2)。側線管は不完全で、末端は尾部中央付近に位置する。歯はやや小さく、尖った円錐形で後方に湾曲。両顎歯および鋤骨歯は 1 列。上顎間歯は半円状に配列し、幅広い歯帯を形成しない。上顎歯は口を閉じた状態でも吻腹面の縦溝から確認できる。背鰭始部は肛門より後方に位置し、臀鰭始部は肛門の直後に位置する。背鰭と臀鰭は低い。尾鰭は小さいが明瞭で、背鰭および臀鰭と接続し、後縁は丸い。胸鰭を欠く。

色彩 生鮮時 (Fig. 1) — 頭部背側、下顎、軀幹部背側、および尾部は一樣に淡黄色で、頭部はやや赤味を帯びる。吻端と軀幹部腹側は白色、鰓嚢部はやや黄色味を帯びた薄桃色。吻端を除く頭部と軀幹部背側、尾部、および下顎の大部分に多数の黒色素胞が分布する；密度は不均一で、眼の直後で高く、尾部後半で低い。峡部から軀幹部腹側にか

けて黒色素胞を欠く。鰭は白色半透明で、尾鰭の基部付近は黄色。

固定後 — 体は一樣に灰褐色で、腹側はやや淡い。吻端と前鼻管は白色。黒色素胞の分布は生鮮時と同様。鰭は白色半透明。

分布 本種は日本と韓国に分布し (Hibino and Kimura, 2015a), 日本では北海道 (津軽海峡) から宮崎県にかけての太平洋沿岸, 秋田県から熊本県にかけての日本海沿岸, および瀬戸内海 (清水, 2013; Hibino and Kimura, 2015a; 吉郷, 2018; 日比野, 2025; 玉井ほか, 2025) から記録されていた。本研究により新たに鹿児島湾における分布が確認された。

備考 本標本は胸鰭を欠くこと、前鼻孔が管状であること、後鼻孔が口の内側に開口し、開口部が皮弁で覆われること、前鼻孔と後鼻孔の間に感覚管孔を 2 個もつこと、歯が円錐形であり、上顎間歯が幅広い歯帯を形成しないこと、および背鰭と臀鰭が尾鰭と接続し、尾鰭が明瞭であることなどから、McCosker et al. (2012) と McCosker (2022) が示した *Scolecenchelys* の特徴と一致し、さらに背鰭始部が肛門より後方に位置することから、Hibino and Kimura (2015a) が定義した *Scolecenchelys gymnota* 種群に属する。

加えて、本標本は頭長が全長の 9.9% であること、尾部長が全長の 54.0% であること、眼後部に眼下感覚管孔を 3 個もつこと、吻腹面に縦溝があり、前鼻孔の基部前縁より前方に伸びること、吻端が尖ること、口裂末端が眼後縁をわずかに越えること、両顎歯と鋤骨歯がそれぞれ 1 列であること、背鰭始部—肛門水平距離が頭長の 72.3% であること、峡部から鰓嚢腹面に黒色素胞叢がないこと、背鰭前脊椎骨数が 61 であること、肛門前脊椎骨数が 54 であること、総脊椎骨数が 130 であることから、Hibino et al. (2012), Hibino and Kimura (2015a), および日比野・ざんくるす (2025) が示したミサキウナギ *S. aoki* の特徴と一致したため、本種に同定された。ただし、本標本は Hibino and Kimura (2015a) が示した計測値と比較して、鰓孔における体幅の全長比、眼径の頭長比および吻長比がやや小さい値を示したが、本研究では種内変異とみなした。また Hibino et al. (2012) はミサキウナギの下顎—前鰓蓋感覚管孔を 5 + 3 個としたが、本標本では左右ともに 6 + 3 個確認された (Fig. 2)。ミミズアナゴ属の一部の種では下顎—前鰓蓋感覚管孔数の個体変異が知られており、ミミズアナゴ *S. gymnota* (Bleeker, 1857), サンゴミミズアナゴ *S. iredalei* (Whitley, 1927) では 4–5 + 3 個、フトミミズアナゴ *S. laticaudata* (Ogilby, 1897) では 5–6 + 3 個である (Hibino and

Kimura, 2015a)。そのため、本標本についても種内変異と判断した。

ミサキウナギの国内における分布記録は「分布」の頁に示した通りである。Hibino et al. (2012) は大隅諸島馬毛島産の 1 標本 (NSMT-P 59386) をミサキウナギ *S. aoki* に同定し、それを引用して、波戸岡 (2013) や Motomura (2023) は馬毛島に本種が分布するとした。しかし、同標本は Hibino and Kimura (2015a) によりサンゴミミズアナゴ *S. iredalei* に再同定されたため、馬毛島からのミサキウナギの記録はない (是枝ほか, 2026)。また、Iwatsuki et al. (2017) は日向灘 (大分県、宮崎県、および鹿児島県の太平洋沿岸域) から標本に基づき本種を記録したが、根拠となる標本番号は明示されていない。現在、宮崎大学農学部水産科学講座 (MUFS) が所蔵する魚類標本はすべて鹿児島大学総合研究博物館に移管されている。本研究では、これらの移管標本を調査した結果、宮崎県門川町から採集された 2 標本 [MUFS 32043, 32044 (それぞれ KAUM-I. 409058, 409059 に再登録), 全長 276.1–339.0 mm] が確認された。MUFS 標本台帳上においてミサキウナギはこの 2 標本しか存在していないことから、Iwatsuki et al. (2017) の記録の根拠は宮崎県門川町産の 2 標本であると判断した。このため標本に基づくミサキウナギの分布の南限は宮崎県門川町であり、鹿児島県からの記録はない (Hibino et al. 2012; 日比野, 2025)。したがって、鹿児島湾で採集された標本は本種の鹿児島県初記録であるとともに、分布の南限を更新する記録となる。

Table 1. Counts and measurements of *Scolecenchelys aoki*.

	This study KAUM-I. 220770	Hibino and Kimura (2015a) <i>n</i> = 37
Total length (TL; mm)	84.2	77–460
Counts		
Lateral line before anus	55	53–61
Predorsal vertebrae	61	56–65
Prenatal vertebrae	54	53–58
Total vertebrae	130	130–138
Measurements (% of TL)		
Head length	9.9	7.6–10
Trunk length	35.6	34–38
Prenatal length	45.8	42–48
Tail length	53.7	51–57
Body depth at gill opening	1.7	1.3–2.7
Body width at gill opening	1.3	1.5–2.3
Body depth at anus	1.4	—
Body depth at anus	1.1	—
Measurements (% of HL)		
Head depth	19.2	18–35
Head width	16.9	17–31
Anus to origin of dorsal fin	72.3	10–77
Eye diameter	3.6	4.9–8.1
Interorbital width	7.1	5.8–14
Snout length	20.5	15–20
Upper-jaw length	34.9	31–38
Mouth gape	27.7	25–28
Gill-opening length	4.8	4.1–8.4
As % of snout length		
Eye diameter	17.6	23–45

Muraenichthys sibogae Weber and de Beaufort, 1916

シラスミミズアナゴ

(Figs. 3, 4; Table 2)

標本 KAUM-I. 219903, 雌, 全長 111.3 mm, 鹿児島県奄美市名瀬大熊大熊漁港 (奄美群島奄美大島), 28°24′13″N, 129°31′05″E, 水面, 2025 年 8 月 24 日, 手網, 是枝伶旺氏採集。

記載 計数・計測値は Table 2 に示した。体は細長く、軀幹部から尾部にかけてよく側扁する。尾部は肛門前長より明らかに長い。頭部は小さい。頭部背縁はゆるやかに膨らむ。鰓嚢部は大きく膨らむ。吻は短く、吻端は下顎先端よりわずかに前方に突出し、やや鈍い。前鼻孔は吻端のやや後方に位置し管状で、眼径よりやや短い。後鼻孔開口部は口の外側、眼の直前に位置し、前縁に三角形の小皮弁をもつ。眼はやや大きく、上顎のほぼ中央に位置する。口裂末端は眼の後縁よりはるか後方に位置する。鰓孔は眼径より小さく、体の側中線からやや下方に位置する。頭部感覚管孔は明瞭。SO は 1 + 4 個、IO は 3 + 2 個で、前鼻孔と後鼻孔の間に 1 個もつ。POM は 5 + 3 個で、ST は 2 個。

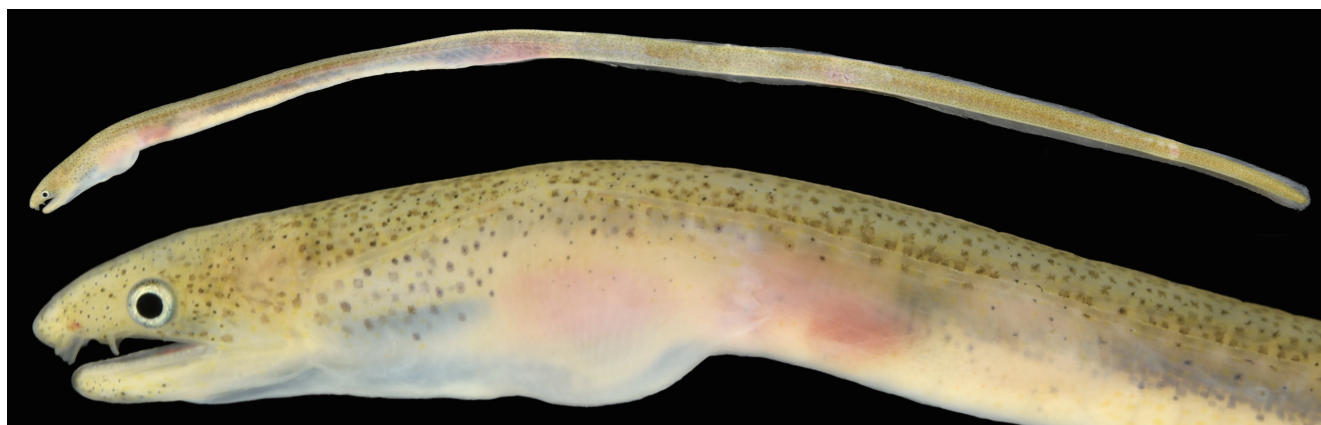


Fig. 3. Fresh specimen of *Muraenichthys sibogae* (KAUM-I. 219903, 111.3 mm TL) from Amami-oshima island, Amami Islands, Kagoshima Prefecture, Japan.

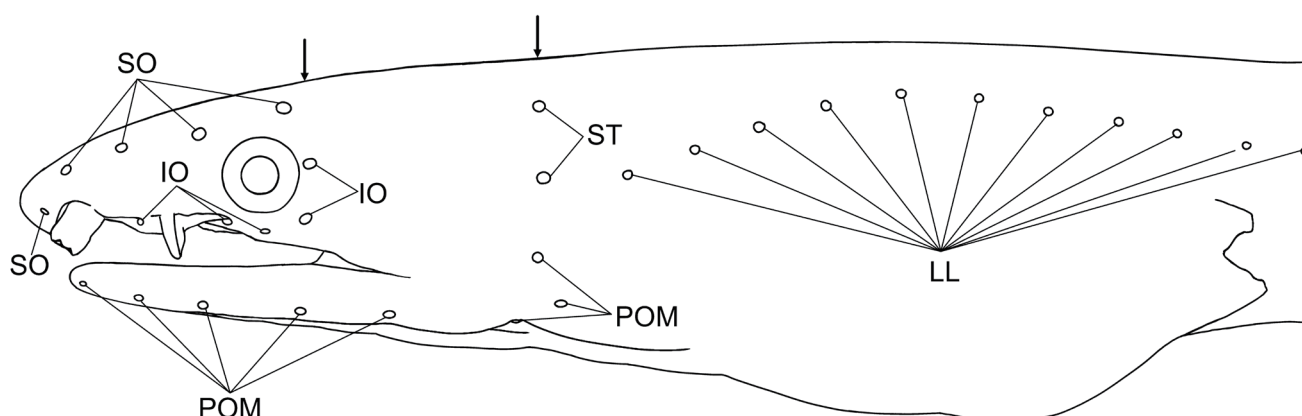


Fig. 4. Lateral view of head of *Muraenichthys sibogae* (KAUM-I. 219903, 111.3 mm TL), showing the lateral-line system. SO: supra-orbital pores; IO: infraorbital pores; POM: preoperculo-mandibular pores; ST: supratemporal pores; LL: lateral line pores. Arrows indicate interorbital (left), median supratemporal (right) pores.

Table 2. Counts and measurements of *Muraenichthys sibogae*.

	This study KAUM-I. 219903	Hibino and Kimura (2016) <i>n</i> = 8
Total length (TL; mm)	111.3	85–107
Counts		
Lateral line before anus	27+16	43–48
Predorsal vertebrae	35	37–42
Preal anal vertebrae	43	42–47
Total vertebrae	144	141–150
Measurements (% of TL)		
Head length	9.9	9.7–11
Trunk length	23.7	22–25
Preal anal length	34.3	33–37
Tail length	65.6	63–67
Body depth at gill opening	2.2	2.1–3.2
Body width at gill opening	1.2	1.2–2.0
Body depth at anus	1.9	1.8–2.5
Body width at anus	1.3	1.4–2.1
Measurements (% of HL)		
Anus to origin of dorsal fin	44.5	13–46
Eye diameter	6.4	6.4–8.4
Interorbital width	7.3	5.1–8.5
Snout length	16.4	11–16
Upper-jaw length	31.8	30–41
Gill-opening length	4.5	2.8–6.4

眼隔域および上側頭中央部にそれぞれ感覚管孔を1個もつ。側線管孔は明瞭で、鰓孔前の側線管孔数は10個 (Fig. 4)。側線管は不完全で、肛門のやや後方まで伸長するものの、第27孔直後で一度途切れる。歯は小さく、先端がやや鈍い円錐形。両顎歯は1列。鋤骨歯は2列をなす。背鰭始部は肛門より前方に位置し、臀鰭始部は肛門の直後に位置する。背鰭と臀鰭は低く、尾端付近でわずかに高くなる。尾鰭は小さいが明瞭で、背鰭および臀鰭と接続し、後縁は鈍い。胸鰭を欠く。

色彩 生鮮時 (Fig. 3) — 頭部背側, 下顎, 軀幹部背側, および尾部は一樣に淡黄色。頭部と軀幹部背側, 尾部および下顎前半部に多数の黒色素胞が分布し, 密度はほぼ均一。峡谷から軀幹部腹側にかけて黒色素胞を欠く。軀幹部から尾部にかけての体側に外傷による鬱血痕と思われる赤色斑が散在。頭部腹側, 軀幹部腹側は白色。鰭は白色半透明。

固定後 — 体は一樣に灰色で, 腹側は淡い。黒色素胞の分布は生鮮時と同様。鰭は白色半透明。

分布 本種は太平洋の熱帯・亜熱帯域に分布し, 日本, フィリピン, チモール島, パラオ, アルノ環礁, サモア諸

島から記録されている（日比野・木村，2016）．日本では沖縄島（日比野・木村，2016；日比野ほか，2021）と伊江島（日比野・木村，2016）から記録されていた．本研究により新たに奄美大島における分布が確認された．

備考 本標本は後鼻孔が口の外側に位置し，開口部前縁に小皮弁をもつこと，前鼻孔と後鼻孔の間に眼下感覚管孔を1個もつこと，前鰓蓋感覚管孔を3個もつこと，胸鰭を欠くこと，および尾鰭は小さいが明瞭で背鰭および尾鰭と連続することなどから，Hibino and Kimura (2015b) と Hibino et al. (2019) が示した *Muraenichthys* の特徴と一致する．加えて，本標本は頭長が全長の9.9%であること，背鰭始部が肛門直上よりわずかに前方に位置し，背鰭始部—肛門水平距離が頭長の44.5%であること，尾部が長く，全長の65.6%であること，主上顎骨歯が1列であること，鋤骨歯が2列であること，肛門前脊椎骨数が44であること，総脊椎骨数が144であることから，日比野・木村（2016）および日比野・ざんくるす（2025）が示したシラスミズアナゴ *M. sibogae* の特徴と一致したため，本種に同定された．ただし，本標本は日比野・木村（2016）が示した計数・計測値と比較して，肛門における体幅の全長比および背鰭前脊椎骨数がわずかに小さい値を示したが，その差は軽微であるため，本研究では種内変異とみなした．

本標本は腹部が膨らんでおり，腹腔内に直径0.7 mm 前後の卵が多数確認された．本種は成熟サイズが全長100 mm 前後と比較的小さく，少なくとも全長89 mm で成熟した卵母細胞（0.70–0.79 mm）をもつ個体が存在することが知られており（日比野・木村，2016；日比野・ざんくるす，2025），今回採集された標本は成熟個体であると考えられる．

シラスミズアナゴの分布記録は「分布」の頁に示した通りであり，これまでの分布の北限記録は沖縄島であった（日比野・木村，2016）．したがって，奄美大島から採集された標本は鹿児島県初記録であるとともに，本種の分布北限を更新する記録となる．本標本は漁港の常夜灯に照らされた水面付近を遊泳しているところを採集された．このように表層で抱卵個体が採集された事例は本種（日比野・木村，2016，本研究）やサンゴミズアナゴ（餐場ほか，2026）において確認されており，本標本は産卵のために水面付近まで遊泳してきた個体である可能性がある．しかしながら，ウミヘビ科魚類は繁殖生態に関する知見に乏しく，抱卵個体が実際に表層付近で産卵するかは不明である（日比野・ざんくるす，2025；餐場ほか，2026）．また，餐場ほか（2026）はサンゴミズアナゴにおける表層での遊泳行動について，確認された外傷から衰弱していた可能性を挙げており，本標本においても体表に外傷が確認されたことから，本標本が衰弱していた可能性もある．今後，本種における繁殖生態の解明が期待される．

比較標本 ミサキウナギ（2個体）：KAUM-I. 409058，全長276.1 mm，KAUM-I. 409059，全長339.0 mm，宮崎県東臼杵郡門川町庵川，2009年4月21日．

謝 辞

本研究をとりまとめるにあたり，鹿児島大学水産学部附属練習船南星丸の乗組員のみなさまには標本の採集にご協力いただいた．北里大学海洋生命科学部（採集当時鹿児島大学大学院連合農学研究科）で Ichthy 担当編集委員の是枝伶旺博士には標本の採集にご協力いただき，産地や採集時の状況に関する情報と原稿に対する適切な助言をいただいた．琉球大学大学院理工学研究科の佐藤大義氏には標本を寄贈いただいた．鹿児島大学大学院連合農学研究科の橋本慎太郎氏と金井聖弘氏，および匿名の査読者には原稿に対して適切な助言をいただいた．また鹿児島大学総合研究博物館魚類分類学研究室の学生とボランティアのみなさまには標本の作製，撮影および登録にご協力いただいた．以上の方々に謹んで感謝の意を表する．本研究は鹿児島大学総合研究博物館の「鹿児島・琉球列島の魚類多様性調査プロジェクト」の一環として行われた．本研究の一部は公益財団法人日本海事科学振興財団「海の学びミュージアムサポート」，JSPS 科研費（20H03311・21H03651・23K20304・24K02087・26K08936），JSPS 研究拠点形成事業—B アジア・アフリカ学術基盤形成型（CREPSUM JPJSCCB20200009），文部科学省機能強化費「世界自然遺産候補地・奄美群島におけるグローバル教育研究拠点形成」，および鹿児島大学のミッション実現戦略分事業（奄美群島を中心とした「生物と文化の多様性保全」と「地方創生」の革新的融合モデル）の援助を受けた．

引用文献

- 餐場空瑠・橘 皆希・遠藤広光．2026．高知県から得られたウミヘビ科サンゴミズアナゴの追加記録．Ichthy, National History of Fishes of Japan, 67: 1–5.
- 波戸岡清峰．2013．ウミヘビ科, pp. 266–277, 1794–1892. 中坊徹次（編）日本産魚類検索 全種の同定．第3版．東海大学出版会，秦野．
- 日比野友亮．2025．ミサキウナギ, p. 55. 木村清志・笹木大地（編）美し国の魚たち 三重県の魚類図鑑．木村清志，伊勢．
- Hibino, Y., H.-C. Ho and S. Kimura. 2015. A new genus and species of worm eels, *Sympenchelys taiwanensis* (Anguilliformes: Ophichthidae: Myrophinae), from the northwestern Pacific Ocean. Zootaxa, 4060: 41–48.
- Hibino, Y., H.-C. Ho and J. E. McCosker. 2019. A new species of *Muraenichthys* (Anguilliformes: Ophichthidae) from Taiwan, with redescription of *Muraenichthys thompsoni* Jordan & Richardson, 1908. Zootaxa, 4702: 41–48.
- Hibino, Y. and S. Kimura. 2015a. Revision of the *Scolecenchelys gymnota* species group with descriptions of two new species (Anguilliformes: Ophichthidae: Myrophinae). Ichthyological Research, doi: 10.1007/s10228-015-0485-4 (Sept. 2015), 63: 1–22 (Jan. 2016).
- Hibino, Y. and S. Kimura. 2015b. A new species of *Muraenichthys* (Anguilliformes: Ophichthidae) from the Indo-Pacific, with revised generic diagnosis. Zootaxa, 4060: 62–70.

- 日比野友亮・木村清志. 2016. 琉球列島から得られた日本初記録のウミヘビ科魚類 *Phyllophichthus xenodontus* および *Muraenichthys sibogae*. 魚類学雑誌, 63: 135–142.
- 日比野友亮・木村清志・波戸岡清峰. 2013. 鹿児島県喜界島から得られた日本初記録のウミヘビ科フトミミズアナゴ (新称) *Scolecenchelys laticaudata*. 魚類学雑誌, 60: 35–41.
- Hibino, Y., S. Kimura, K. Hoshino, K. Hatooka and J. E. McCosker. 2012. Validity of *Scolecenchelys aoki*, with a redescription of *Scolecenchelys gymnota* (Anguilliformes: Ophichthidae). Ichthyological Research, 59: 179–188.
- 日比野友亮・宮本 圭・桜井 雄・木村清志. 2021. 琉球列島における 2016 年 1 月の大寒波に伴い打ち上げられた 2 種の日本初記録種を含む海産ウナギ目魚類. 北九州市立自然史・歴史博物館研究報告 A 類 (自然史), 19: 13–26.
- 日比野友亮・ざんくるす. 2025. 日本産ウミヘビ科魚類図譜. 文彩堂出版, 東京. vii + 24 pls. + 35 pp.
- Iwatsuki, Y., H. Nagino, F. Tanaka, H. Wada, K. Tanahara, M. Wada, H. Tanaka, K. Hidaka and S. Kimura. 2017. Annotated checklist of marine and freshwater fishes in the Hyuga Nada area, southwestern Japan. Bulletin of the Graduate School of Bioresources, Mie University, 43: 27–55.
- 是枝伶旺・松本達也・古橋龍星・橋本慎太郎・出羽優風・佐藤智水・金井聖弥・栗山顕太・久保田雄斗・畠中柚菜・前田知範・本村浩之. 2026. 種子島から得られた魚類 19 種. Ichthy, National History of Fishes of Japan, 68: 5–19.
- McCosker, J. E., S. Ide and H. Endo. 2012. Three new species of ophichthid eels (Anguilliformes: Ophichthidae) from Japan. Bulletin of the National Museum of Nature and Science, Series A (Zoology), Supplement, 6: 1–16.
- McCosker, J. E. 2022. Ophichthidae, pp. 101–137. In Heemstra, P. C., E. Heemstra, D. A. Ebert, W. Holleman and J. E. Randall (eds.) Coastal fishes of the western Indian Ocean. Vol. 2. South African Institute for Aquatic Biodiversity, Makhanda.
- 本村浩之. 2009. 魚類標本の作製と管理マニュアル. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 70 pp.
- Motomura, H. 2023. An annotated checklist of marine and freshwater fishes from Tanega-shima and Mage-shima Islands in the Osumi Islands, Kagoshima, southern Japan, with 536 new records. Bulletin of the Kagoshima University Museum, 20: 1–250.
- 清水孝昭. 2013. 愛媛県瀬戸内海域より初記録の魚類. 南予生物, 17: 14–35.
- 玉井隆章・鈴木克明・高見宗広. 2025. 海洋地質調査航海 GB23 により東シナ海及び日本海において採集された魚類. 地質調査研究報告, 76: 299–311.
- 吉郷英範. 2018. 広島県から記録されている海産魚類目録. 比和科学博物館研究報告, 59: 127–203.